

富士山と雪代

雪代とは、通常、春になって山の雪がとけて川水の増すことをいい、「雪代が出た」と表現されることが多い。このような言葉を使うところは、宮城県仙台市・登米郡、秋田県雄勝郡、山形県飽海郡、新潟県岩船郡、福島県南会津郡、群馬県、東京都西多摩郡奥多摩町、神奈川県津久井郡（相模原市）、山梨県南巨摩郡早川町奈良田、長野県、静岡県磐田郡などであるとされるが（『国語大辞典』など）、山梨県の富士北麓地域でも聞かれる。

富士山にも雪代が存在し、災害が発生している。これは春先の急激な気温上昇にともなって起こる融雪による土石流で、中世の富士北麓の記録である『勝山記』（妙法寺記）には、天文14年（1545）2月、同23年（1554）正月、永禄2年（1559）正月の3回の雪代について記される。

天文14年2月11日は、西暦では1545年の3月23日に当たる。雪解水は土石流となって、麓の吉田（上吉田）を襲った。その水下に当たる下吉田では、「冬水」（水かけ麦）に甚大な被害を与えたと記録されている。

天文23年は、西暦1554年で、この年の正月に「雪水」（雪代水）が富士山より押し出してきた。正月、2月、3月まで1回も繰り返し流れ出た。あまりの不思議さに書き付けておく、とある。永禄2年、1559年正月の申の日にも「雪水」が出て田地、家、村をことごとく流した、と記される。吉田宿（上吉田村）の元龜3年（1572）の「新宿」（同村）への移転・成立も、その災害を避けるためだったといわれている。

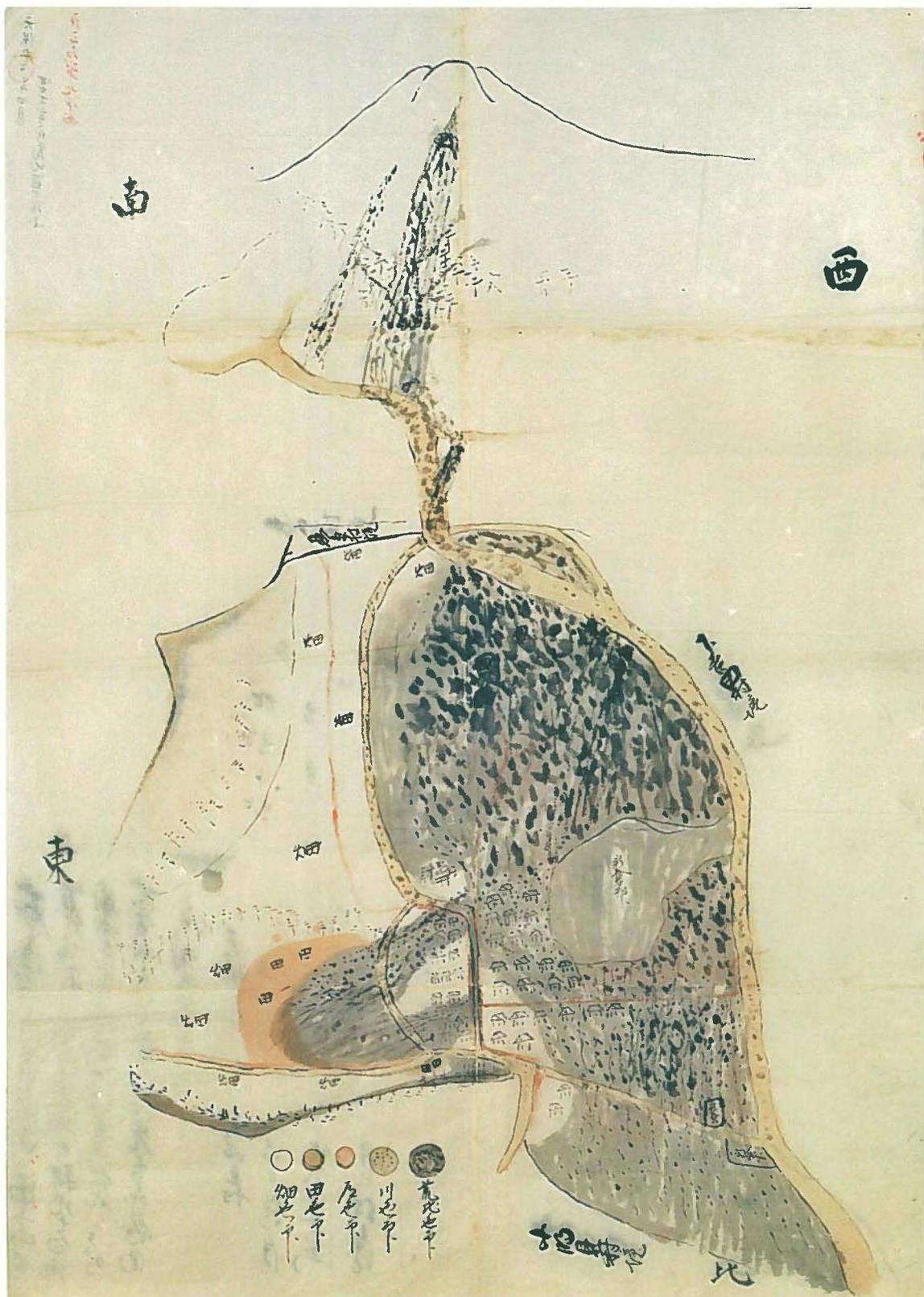
江戸時代の絵図をみると、市域では、堀（空堀、雪代堀）と川を明確に区分する。堀は大雨が降った日やその翌日などにのみ水が流れるもので、一方、川は常に水の流れがあるもので、堀にはしばしば流れに沿って石積による堤防が描かれる。

天保5年甲午の雪代は、後に「午流」（うまながれ 午流）と称された未曾有の激甚災害であった。それを克明に記録した「富士山雪代絵図」がおおあすみ大明見村文書

（財産区文書）の中に残されている。この絵図は、「かぶせえず被絵図」の形態をとる。大明見村絵図の上に、雪代の災害状況を貼り重ねてかぶせ、被災前と被災後と比較できるように工夫している。南西にある富士山を上方に描く。山中湖と推定される楕円形の下端から流れ出すのが桂川であり、しばくさ忍草村境で西側に大きく屈曲しながら流下する。被災前の図は、下位中央部に短冊形の地割に沿って家並が展開し、その周囲を田畑が囲み、下吉田村境を桂川が湾曲して流れ下る様子を示す。被災後の図は、大明見を襲った雪代（図中の「荒地色印」）の主流が、富士山の山容中央に描かれた滝沢堀から大規模に押し出した様子を描く。南側の堀（与兵衛流）からも押し出して、桂川に入って一気に流れ下り、桂川が屈曲する忍草村境で大明見村の耕地にそのまま乗り上げて、村落の東側を流れる長尾川以西の田畑を雪代水の土砂で覆って、「荒地」とした。雪代の流は、村落南限の浅間神社付近で分流し、桂川支流の古屋川の谷を三日月状に遡上して、家並や「田」に被害をもたらしたことがわかる。

災害の起こったのは旧暦の4月8日、お釈迦さまの日だったと伝えられている。この年は春になっても一向に陽気が緩まずにいつまでも寒い日が続いていた。前日からの暴風雨で陽気が緩み、翌日も吹き降りが続いた。この日、御山（富士山）でゴーンというものすごい山鳴りがして、それから一時ほどして雪代が押し出してきたという。山体は凍りついていて表面の雪だけが解け出し、立木や土砂を巻き込んで勢いを増した流れが氷の滑り台のような傾斜面を一気に駆け下って、雪代堀沿いに流れ出してきた。桂川通や宮川筋は大災害を蒙った。このときの雪代を「午年の流」と呼んで災害を語り継いできた。現在も下吉田村境に堤防が残るのは、その災害よけの智恵である。

堀内 真（富士吉田歴史民俗博物館学芸員）



↑ 被害状況